

SONRISA

そんりさ vol. 171



息子を治安部隊に殺害された母親

革命から四〇年を迎えたニカラグアの今

02	革命から40年を迎えたニカラグアの今	……柴田 大輔
06	ベネズエラ・カラカスでの時間（その2）	……江指 美穂
10	エクアドル・インタグ地方鉱山開発対象地を巡って	……一井リツ子
14	回想のラテンアメリカ コロンビア編	……唐澤 秀子
16	ラ米百景 ポリビア政変で甦った先住民族の悪夢	……伊高 浩昭
17	メキシコ料理 シーフードライス	……ミゲル・アクーニャ
18	ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み	……小林 致広

2020年1月18日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）発行

革命から 40 年を迎えたニカラグアの今

柴田 大輔

中米ニカラグアでは 2018 年、全国に反政府デモが広がり、デモ隊と政府治安部隊の衝突から 300 人以上が犠牲となった。1979 年の革命から 40 年目を迎えるニカラグアでは今何が起きているのか。2019 年 7 月から 9 月にかけて現地を訪ねた。

1. 2018 年の反政府デモと戦場のような光景

2018 年、戦場のようなニカラグアの動画がインターネット上にあふれた。スマートフォンで撮影したと思われる縦長の映像は、一人の女学生が泣き叫びながら母親に助けを呼びかけている。後ろでは様々な方向から銃声が鳴り響いていた。その他にも血を流し倒れこむ人々などが SNS のタイムラインに流れこんでいた。

同年 4 月、ニカラグア政府は、年金減額と社会保障費値上げを含む社会保障制度改革案を発表した。一方的な決定に反発する学生らが街頭でデモ行進を始めた。SNS での呼びかけは、瞬く間に全国に波及し、各地で大規模な反政府デモが繰り返された。政府はこれに実弾で応じ、両者の対立は激化した。動画はこうした衝突の場面であり、同年 9 月までに、300 人を超える市民が治安部隊に殺害されたとされる。

ニカラグアでは、1979 年 7 月、国を私物化し暴力で国民を支配したソモサー族を、サンディニスタ民族解放戦線が打ち倒した。「ニカラグア革命」とよばれている。

自由のために立ち上がったはずの革命政府が、なぜ、自国民に銃弾を浴びせているのか。2019 年 7 月は革命から 40 年目の記念式典が開かれる。その前後を現地で過ごすことでわかることがあるのではないかと考えた。

2. 革命記念式典で見た不可思議な出来事

ジリジリと肌が焼けるような強い日差しが照りつける。広場を埋め尽くす数万人の人々が赤と黒に二分された「革命のシンボル」である与党・サンディニスタ民族解放戦線の旗をかかげている。

2019 年 7 月 19 日、ニカラグアの首都マナグア



革命 40 周年式典の壇上に立つオルテガ大統領とムリージョ副大統領

の広場で革命 40 周年を祝う式典が開かれた。式典が始まる午後 2 時、正面に設営された特設ステージ上に、各国から招待された政府関係者が登壇する。続いて、ダニエル・オルテガ大統領と夫人のロサリオ・ムリージョ副大統領が現れると、会場は大きな歓声に包まれた。オルテガ大統領が演壇に立つと、会場からさらに大きな歓声が沸き起こる。大統領に続いて各国の来賓が祝辞を述べた。

17 時半頃、式典の最後に大統領が再びマイクを取った。陽は沈みかけあたりはすでに薄暗い。この時、私は会場から少し離れたところで写真を撮っていた。周辺には複数の大型スクリーンが置かれ、大統領の顔がアップで映される。

私は慌てて会場に引き返すと、不思議な光景を目にした。会場に続く大通りを大勢の人が会場と逆の方へと去り始めているのだ。もう一つ不可思議だったのが、スクリーンに映る「VIVO (中継)」のテロップとともに流れる政府系テレビ局の映像だ。演説するオルテガ大統領のアップと交互に流れる上空からの映像は、人で埋め尽くされた会場の様子だった。

しかし会場につくと、スクリーンでは隙間なく人で埋め尽くされていたはずの会場が、実際は後方では隙間が目立つほど人が減っていた。これは一体なんだろう？ そういえば「中継」の映像はまだ日が高いものだった。数時間前の一番人の多い時間帯の映像だったのだ。「中継」として流されて

いた映像は「ウソ」なのだった。

後日、地元住民に話を聞くと、会場にいた参加者の多くはマナグア市やその近郊の町から半ば強制的に動員されバスで集まった人々だと聞いた。ノルマがあったという。バスを遠くにとめた人は帰りの人ごみを避けるため早めに外に出たのではないかという。式典を権威づけするための動員だったとしたら雑な気がする疑問の残る場面だった。

この他にも政府に関する事で疑問が多い。報道では、反政府デモ参加者を撃ったグループが政府によるものなのかどうか疑問がもたれていた。反対派は政府が組織した「民兵」「狙撃隊」だといひ、大統領はその存在を「知らない」と否定した。また、警察にも死者が出ていることから、政府は反政府組織が仕掛けた「極右組織によるクーデター」だと言っていた。

この極端な言説の間で一体何が起きていたのだろうか？「革命記念日」の様子から、情報の真偽を疑う必要があるようだった。様々な人に会い、話を聞いた。

3. かつての敵同士が「反政府」で結びついていた

2018年の治安悪化から難民となったニカラグア人が隣国コスタリカに約9万人いる。コスタリカで会った難民に話を聞いた。

コスタリカの首都サンホセの中央公園から5ブロックのところの古びた家がある。ここにニカラグア難民50人ほどが肩を寄せ合い暮らしている。その場所は一般的に治安が悪いといわれるナイトクラブが集まる場所にある。以前はキリスト教系団体が孤児支援に使っていた。長年放置されたその家を、ニカラグアの状況に心を寄せる家主が支援団体を通じて難民グループに貸し出している。

ここでリーダー的な立場にあるマリア・レオノルさんに話を聞いた。彼女はマナグア市近郊のマサヤ市出身で、2018年8月にコスタリカへ亡命し、現在は難民ビザを取得し暮らしている。マサヤは、もっとも激しい衝突がおき、多数の死傷者が出た。

現在、難民らはそれぞれが農場や商店などで日雇い仕事を探したり、食べ物や雑貨を仕入れて路上で売るなどしたりして、その日の糧を得ている。習慣の違いから差別もあるといひ、「外国人が働き生きていくのは大変だ」と話す。



治安部隊に兄を殺害され、コスタリカで亡命生活を送る若者

彼女はニカラグアで公立病院の看護師として働いていた。「サンディニスタ支持者だった」という。その彼女がなぜ難民になったのか？

彼女が勤務していた病院は、政府から「反政府活動家を病院で受け入れるな」と圧力がかかっていた。しかし、抗議デモには近隣住人も多く、負傷者を見過ごすことができなかった彼女は病院で治療に当たるだけでなく、薬を院外に配って歩いた。後日、自宅に押しかけた警官に連れさられ、警察署内に4日間拘束された。

その間に受けた暴行が元で、妊娠していた彼女は流産した。その後、周辺では反政府運動に加担した人々が次々に警察に拉致され、中には殺害される人もいた。安全のため彼女は家族とコスタリカへ逃げた。

マサヤ市からコスタリカに逃れた人は多い。他の避難民の話を聞いた。

ダビさんは学生らが中心のデモを眺めていた。次第に住民の参加者が増え、政府治安部隊の攻撃が激しくなると、独裁的な現政権に強い不満を持つ彼はデモに加わった。

ダビさんは革命戦争にも参加した元ゲリラ兵士だ。1979年以降は政府軍兵士として内戦を戦った。ニカラグアでは、革命後の1980年代、社会主義革命の拡大を疎む米国が反政府勢力を軍事支援し、内戦が勃発した。反政府勢力を「コントラ」と呼ぶことから「コントラ戦争」という。1989年の停戦までに、約4万人の死者と100万人あまりの避難民を出した。

ホセ・エスピーノさんは「コントラ」の元・司令官だ。反政府デモ参加者は若者が多く戦い方を知らなかったという。そこでホセさんは政府治安部

隊との対峙の仕方を教えたという。コンクリートブロックを積み上げて、治安部隊の街への進入を防ぎながら銃撃に対処した。

マサヤでは、ホセさんやダビさんのように、内戦を戦ったかつての敵同士が「統一戦線」を組んでいたのだった。ここに「武器」を供給していたのも町の人だった。自動車整備工である男性は、自宅の工場で鉄パイプを切った「手製迫撃砲」を作って配っていたと話す。

他の町はどうだったのか？カラソ県から亡命したという男性が暮らしていた町では、反政府活動にサンディニスタ派住民の大部分が参加していたという。彼自身は40代後半で、以前は政府軍兵士だった。「私はサンディニスタ支持者だが、オルテガ大統領のやり方には怒りを持っている」と話す。元軍人の彼は銃の扱いに慣れていて、衝突の中で警官ともみ合いになり奪った銃で銃撃戦になった。

報道で反政府活動家が武装していたという話がある。政府側でデモ隊の鎮圧に当たった元狙撃隊員に話を聞くと、「デモ隊は銃を持っていた。それはピストルや猟銃だった。自動小銃など軍隊が持つ武器は見えない」と話している。前述の元軍人の話と合わせると、奪った武器が自動小銃だったケースもあるかもしれない。

警察側の死者については元狙撃兵が「(狙撃隊を構成した) 警官やサンディニスタ青年部の若いやつらは経験も腕もなく同士撃ちをするほどだった」と話していた。様々な人から話を聞くほど「極右勢力によるクーデター」という政府側の説明の信憑性は薄いように思われた。

4. 抗議活動と若者たちの SNS

「watsapp (通信アプリ) で連絡を取り合った」と話すのは、マナグアの中米大学で社会メディアを専攻するマキシミリアーノ・メヒアさんだ。彼も現在コスタリカで亡命生活を送る。ニカラグアでは、学生記者として活動し、全国の学生同士で通信アプリを使ってグループを作り、日頃からやりとりを繰り返していたと話す。2018年の反政府活動のときも、スマートフォンを使い、「グループ」の中で情報を発受信していた。

衝突の発端は2018年4月初めにさかのぼる。ニカラグア南西部の自然公園で大規模な森林火災がおき、これに対する政府の対応が遅れた。環境

問題に敏感な学生が SNS で呼びかけあい、首都マナグアで音楽を流しながら抗議デモをした。このとき、駆けつけた機動隊との間で小競り合いがおきた。これが4月13日だった。

その5日後、政府から年金減額、保険料引き上げを含む社会制度改革決定が発表された。国民生活に関わる一方的な決定に波紋が広がった。ここで前述の学生たちが再び SNS を通じてデモを呼びかけた。同調する人々が街にでた。

はじめは首都マナグアと、マナグアから80キロほどの都市レオンでデモが始まった。これに政府は狙撃隊を投入し、衝突は前回よりも激化した。この様子が瞬間にインターネットで拡散し、全国で政府に不満を持つ人々が連日抗議活動をおこすようになった。

市民の怒りはすでに社会保障問題に対してだけではなくなっていた。汚職や不正、独裁的な政権運営、理不尽な市民への暴力など、国を私物化するオルテガ大統領への怒りが爆発した。

5. 国内で続いていた暴力と独裁

不満の元はどこにあったのか？

革命戦争に参加し、2018年まで警察官として働いたアントニオさんは、「政府の暴力は以前から続いていた」と話す。彼が話すのは、農村での警察・軍による暴力と、住民の治安機関に対する不信だ。

内戦時、反政府勢力の「コントラ」は、隣国のホンジュラスで組織され、国境を越えてニカラグア政府軍と戦った。特に国境に近い場所で戦闘が激しく、政府軍はコントラとの繋がりを疑う住民に対しても攻撃を加えていた。住民虐殺も起きていた。内戦終了後も、コントラの活動が活発だった地方を中心に、内戦時代の治安機関と住民の対立的な力関係が残っていた。アントニオさんは「地方で農民は公権力を怖がっていた」と話す。

マナグアの人権団体で活動するパブロ・クエルバ弁護士は「オルテガ政権による暴力は今に始まったことではない」と話す。「オルテガ政権下では以前から拷問が多数報告されている。特に地方では、警察や軍による令状なしでの市民の拘束や暴力が繰り返されてきた。農村では、報復を恐れて告発できない人が多く、外部から見えにくい」という。マナグアの刑務所では、オルテガ政権下での囚人への拷問も多数報告されている。

現在はコスタリカに亡命し、ニカラグアでは主に労働問題に取り組んできたアルバロ・レイバ弁護士は、2018年の反政府デモを「以前から溜まっていた独裁的な現政権への不満が爆発した」ものだと話す。

オルテガ大統領は1990年に選挙に敗れ下野したのち、2007年に返り咲くと、徐々に独裁色を強くしていった。党内の反対派を排除し、メディアを買収して政府の支配下に置いた。さらに最高裁の判事や最高選挙管理委員会に自身と近い人物を置き、大統領の連続再選を禁じた憲法を改正して「無限再選」を可能とした。

さらに2017年には、ムリージョ夫人を副大統領に据えた。現在は与党であるサンディニスタ党は、国会議席の4分の3を占め、国政に圧倒的な影響力を持っている。

貧困対策にも乗り出していたものの、農地改革や産業構造といった貧困を生む直接の原因となっている社会構造改革に関しては、ほとんど手が付けられていない。2007年以降のオルテガ政権を支えたベネズエラからの多額の資金援助の受け入れを自身の影響下にある民間企業に担わせたうえ、その下部組織の責任者に側近や親族関係者をつけていた。こうした縁故主義による公的資金の私的な流用の強い疑いも持たれるなど、現政権の不正と汚職の蔓延が指摘されている。

アルバロ弁護士はこう話す。「この国では『社会主義者』が億万長者になった。現政権下で貧富の格差が拡大したというのは、政権の本質を表している」。

6. 自由を失うニカラグアの現状

2019年8月、マナグアで取材していると、ツイッターに「8月23日、不当逮捕された政治囚解放を政府に対して要求する『全国クラクション・アクション』をしよう」という呼びが流れてきた。23日18時に、それぞれが、その時にいるそれぞれの場所で、車やバイクのクラクションを鳴らすことで、政府へ反対の意思を表現しようというものだ。

ニカラグアでは政府系メディア以外が閉鎖されど、政府に反する声に強い圧力がかけられている。

また住民相互の監視網が築かれる中で、デモはほぼ完全に押さえ込まれている。「反政府活動に関わった」として逮捕される人、警察などに殺害される市民がいる。こうした中で、市民はどう声を上げ続けるかを模索しているのだ。

当日、私はどこで鳴り出すかわからない「クラクション・アクション」を待つため、市街地へ向かった。撮影場所を探そうとショッピングセンターの駐車場をウロウロしていると、荷台に武装警官を乗せたピックアップトラックがピタリとついてきた。不審がられないように、車に気づかないふりをしながら店の中に入った。嫌な汗がダラダラ流れた。

屋外の大通り沿いにちょうど良い場所を見つけてカメラを外から見えないよう服で包みレンズだけ出した。18時前に動画の撮影を始めた。直後、複数の警察車両が目の前を横切った。18時を過ぎて数分後、少し離れたところでクラクションが鳴り出した。わずかな台数だったかもしれない。それでも、確かな抵抗の意思を聞いた。

ニカラグアには「100%ノティシア」という独立系TV局がある。彼らは反政府行動に対する政府の弾圧を報道し続けた。政府は報復として記者を逮捕し、TVスタジオを武装警官に占拠させた。しかし、「100%ノティシア」は国外に亡命した記者らとともに、今もWEBサイトを通じて番組や記事を配信し続けている。どんなに圧力をかけようとも、政府は反対の声を完全に抑え込むことはできなかったのだ。

人権団体の記録では、2018年4月～2019年7月の死者は、624人（警官34人を含む）、負傷者も4,000人余りとされる。およそ1000人に及ぶ市民が不当逮捕されている。この現状と、冒頭の革命記念日に見た、ライブ映像の嘘がどう結びつくのか。

オルテガ政権のほころびと言えるのか。また、市民の間では「統一戦線」の様相を呈していたが、反オルテガの立場をとるサンディニスタ内部、野党、経済界は決して一枚岩ではない。大統領が軍部を抑えているといわれる中で、まだ先が見えない状況にある。

ベネズエラ・カラカスでの時間（その2）

江指 美穂

デモの日

「午後 12 時から午後 6 時まで道路封鎖 (Trancazo) を実施する。」野党による政府への抗議活動の呼びかけだ。ツイッターなどでも呼びかけ、道路封鎖やデモが頻繁に行われた。最初は、1 日数時間だったのが、12 時間、24 時間、48 時間など…実施時間がどんどん伸びてくる。デモが頻繁に行われていた期間は、ほぼ毎日どこかでデモがあった。そしてそれを混乱させるための「そのデモ計画はキャンセルされた」という偽の情報も同時に出回る。15 分ほど離れたところに車で行くにもデモで道路封鎖されていて通れないことは頻繁にあった（人がいなくてもゴミや木の枝、紐を張るなどして封鎖する）。

常に出かける前に今日は何時から何時までデモがあるのか、どの道路を封鎖しているのか、野党の公表にはなかったが住民が道路封鎖を自主的にやっている道はないかラジオやツイッターを確認した。ある日、デモは終了したと思って出かけたが、まだ終わりきっていない道路に出てしまった。催涙弾が立ち込めているところをわっと人が車の方に逃げてきたので、急いで逆走して違う道路から遠ざかった。

別の日、事務所の近くまで軍や警察がデモ参加者を追いかけてきているから、今事務所を出ないようにとの連絡があった。いつ出られるのかと様子を見ていると、デモ参加者の群れがわーっと走ってくるのが見えた。その後をバイクに乗った軍や警察が追ってくる。参加者はちりぢりになったが、数人が近くのレストランに逃げ込もうと走っていった。



野党呼びかけによる街頭デモ (2017 年 4 月撮影)



野党呼びかけによる道路封鎖

(2017 年 8 月撮影)

そこへ後ろから催涙弾が発射され、レストランも一緒に催涙弾の煙に包まれた。事態が収拾してから事務所を出たが、まだ催涙ガスが漂っているかもしれないから、濡らしたハンカチで覆って出るようにと言われて帰宅した。

現金がない

クリップや輪ゴムで留めた現金。もちろん財布に入らないためポーチなどに入れて持っていた。

(赴任当時の 2016 年で最高額紙幣が 100 ボリバル。10 円ほどの価値だった。) インフレが日に日に進み、最初は札束の現金を持ち歩けないため、その後は現金が手に入らないため、支払いがカード払いが主流となっていた。ATM には時々しか現金が入れられなくなった。

あの ATM にお金入ったよ、と聞いて仕事中に下ろしに走る日々。その内 ATM に現金があることはなくなり、銀行の窓口でチェックで下ろしに行っても 1 回数百円程度しか下ろせなくなった。それも銀行にあるキャッシュの量で日によって引き出せる金額は変わる。(2018 年 5 月当時で下せたのが最大 20 万ボリバル (250 円程度) だった。)

2016 年 12 月、それまでの最高額紙幣 100 ボリバル札の使用を 72 時間以内に中止すると発表された。最高額紙幣と言ってもインフレ下で一番使用されていた紙幣である。流通停止になる前に 100 ボリバル紙幣を預金しようと、国民は銀行に長蛇の列を作った。銀行口座を持っていなかった人たち向けに身分証明書のみで銀行口座の開設を可能としたため、さらに長蛇の列ができた。新しく高額紙幣が届くとされたが、100 ボリバル札の停

止は近づくのにまったく出回ることなく、見たことがあるという人はいなかった。

それでも商店などは 100 ボリバル札の受け取りを拒否する。クリスマス、年末に近い時期で人々はモノが買えず、市民は怒り暴動も起こった。カード払いが主流だったとは言え、地方では現金のみで商いを行う店もあるし、カラカスでも駐車場の支払いやチップは現金というところも多い。

発表から 72 時間後の 100 ボリバルが使用できるとされた最終日、道端に 100 ボリバル札が落ちていて風にひらひらと舞っていた。お札が道を舞っているのに誰も見向きもしない、異常な風景だった。その最終日に駐車場の人にチップを渡そうと思ったが 100 ボリバル札しか持っておらず、100 ボリバル札ならいらぬよと断られた。数時間後 100 ボリバル札の使用を延長すると大統領は発表。以降延長され続け、デノミが行われる 2018 年までずっと制度上 100 ボリバル札は利用可能だった。

ある日ショッピングモールの駐車場に駐車するために入場チケットを取ろうとしたら、その機械に現金しか駐車場の支払いはできません、と書いてある。そういうお知らせはもっと手前で貼ってくれればと…と思いながらも、もう後ろにも車が並んでおり引き返せない。

現金不足でお金が入っていない ATM がほとんどで、銀行にチェックを持って下ろしに行かないといけないう状況だったのだが、何とかなるだろうと、車を駐車した。もちろん私も一緒にいた友人も十分な現金は持っていない。駐車場代を支払う窓口をすべてまわったが、カードの通信が悪くどこの窓口も現金しか取り扱っていないとのこと。

そのショッピングモールの複数の ATM を確認したが、どこにも現金は入っていない。隣のショッピングモールまで行き確認したが、こちらの ATM にもない。再度窓口まで戻って、こうした場合、他の人はどうしているのか尋ねると家族や友人に現金を持ってきてもらっているという。そこで近隣に住む友人に電話するが彼女も現金は持っていないという。

仕方がないので、その窓口の横で支払いに来る人たちに現金を貸してもらえないかと頼んだ。口座にお金はあるので口座番号を教えてもらえればすぐに送金します、と言って。何人か断られた後、ついに貸してもいいという人が現れ、(すぐ送金す

ると言ったがいいと言ってくれた) 何とか帰宅できたのだった。

おカネとモノ

どこでもカード払いのため回線が混みあつてなかなかカードが通らない。ただでさえインフラの整備がされておらず、電話・インターネット回線の接続が悪い。ほぼ全員がカード払い、カード読み取り機の接続が悪いため、1 回で決済が通ることがなく最低 2 回は試す。カード決済にはパスワードだけでなく、住民番号 (cedula) の入力も必要とくる。さらに一つの商品の価格が何百万ボリバルなどと 0 (ゼロ) が多いため、店員も確認しながら価格を入力する。どこに行っても支払いのために長蛇の列になるのは当然だ。スーパーで列に並ぶと最低 30 分はレジまでかかることを覚悟した。

マンションの管理人さんに何か手伝ってもらおうと、お礼の意味でチップを渡していたが、あるところからどんどん価値の下がる現金よりも現物の方がいいという傾向になってきた。管理人さんに挨拶を交わすと、砂糖がほしい、パスタがほしいと言われるようになり、日々お世話になっている人に渡すクリスマスプレゼント (aguinaldo) もクッキーなどではなく、パスタ、食用油、砂糖などを渡すことが普通になった。

モノ不足のため、最近見かけないモノを売っていると聞くと、私の分も買っておいてほしいと頼むという状態。街中でもトイレトペーパーなど不足しているものを購入したスーパーの袋を持っている人には、みんなそれはどこで買ったの? と聞いて買いに行っていた。レストランでも常に「メニューであるものはどれですか?」と確認してから注文する。メニューに載っているものが全部揃っていることはまずない。また料金も毎日変わるため、メニューに料金は一切載っていないかった。

事務所の近くにあったチャカオ市場には高額だが、野菜、フルーツ、精肉、海鮮類が売っていて、いつも多くの人でにぎわっていた。二階にはコーヒー店もあった。その店主と話していると、彼は以前ベネズエラ石油公社 (PDVSA) で働いていたとのことだった。「PDVSA にもう誰も専門家は残っていない、今は軍人が幹部を占める。以前は国の主要産業だったが、もう機能していない。」と話していた。

こうした「元」〇〇という専門的な職業に就いていた人にもたくさん出会った。タクシーの運転手さんは元電気技術者であったり、元教授であったり、元警察であったりした。元々の給料ではやっていけず、タクシーの運転手の方が実入りはいい。せっかく身につけた専門性を活かせずとにかく収入となる仕事へと変える。国外に出た人も同じ状態でレストランのウェイター、掃除、タクシー運転手などをして生活費を稼ぐ。こうして国の頭脳は力を発揮できる場所をなくし、流出し続けていた。

空港にて

全員がキャリーバッグをパンパンにして搭乗を待っている。海外の空港のカラカス行きゲートでよくある光景だ。多くの人が大量に買いだめをして帰ってくるため、預け荷物だけでなく機内持ち込み荷物にも容量最大限に荷物を持ち帰ろうとしているのがわかる。当然頭上の荷物入れに入らない。調整していくつかは預入荷物に変更という手続きを経るため、いつも出発が遅れた。

そうしてやっとカラカスに着くと今度はターンテーブルが動いていない。動いていないエスカレーターなどはいつも見かけたので、修理できていないのかと待っていたが、一向に荷物が出てこない。私の乗った便の荷物だけでなくどの便の人の荷物もほとんど出てこないことがあった。

しばらくして痺れを切らした誰かが大声で言います。「泥棒!」「人のものを盗むな!」軍が荷物をチェックしている時に中のものを物色しているから、荷物が出てこないのだという人たちの声だ。軍を堂々と泥棒呼ばわりして苛立った人。それを取り締まることもない空港職員。軍も周囲にいたと思うが何も言わなかった。結局1時間程度待ち、無事スーツケースが出てきて、人々は何事もなかったかのように荷物を取り帰路に着いていた。

政治家

政府要人やその家族が高級品を身につけていると非難されることがよくあった。大統領夫人やロドリゲス大臣の持つ高級ブランドバッグや時計の写真が出回る。また海外の高級レストランで食事しているところを海外に住むベネズエラ人等に見咎められ、問い詰められたり、高級スーパーで買い物するところを追い出されたりというような映像



国会議事堂（2018年1月撮影）（政治囚として逮捕されていた野党Gilber Caroのポスターが掲げられている）

もたくさんツイッターや野党系の報道で流れた。食べるものにも困る人がいる中、そんな生活をするなんて考えられないという当然の声だ。

では野党はどうかというと大差ない。主要な野党政治家は資産家である。海外の大学を卒業し、会社を持ち、外貨へのアクセスを持っている。テレビに映る時の小奇麗な恰好は与党政治家よりも華やかだ。たまたま友人が入っていたいわゆる高級ジムに招待してもらい行った時、エンリケ・カプリレス（野党政治家・2013年大統領候補）が来ているのに出くわしたこともあった。仕事で会食した野党政治家は、また食事に行きましょうと気軽に食事の会計をしようとしてくれた。

ベネズエラ政治家も主要な人物は、与党・野党問わず金持ちで、双方で、「国民の苦しみをなくす、よい国にする」と声高に訴えているが、真に国民の苦しみを理解できる政治家なんていないんだろうと、思わざるを得なかった。

選挙

2018年5月の大統領選挙。選挙で何かを変えられるという雰囲気、盛り上がりは全く欠けていた。まわりのベネズエラ人15人に投票に行くかと聞いたところ、絶対に行くと言った人は皆無だった。与野党の膠着状態が長引くにつれ、現政権を支持しない人たちの間にもまた今回もどうせダメだ、といった無力感が広がっていた。野党の大統領候補者となりうる政治家への政府による妨害で、まともな野党候補はほぼいない状態だった。

投票したと確認できたのは2人だった。1人は公務員として国軍関係の職務に就いており、投票しないわけにはいかなかったと話し、もう1人は投票しなければマドゥローロ大統領に投票している

も同然であるため、(別の誰かに) 投票したとのことだった。2人ともいわゆる低所得者層といわれる人たちだった。

中所得者以上の国民の多くが投票しなかったと言われる。彼らは一様に選挙プロセスがすでに不正であるから投票しても意味がない、投票したい候補者がいないと述べ、野党の選挙ポイコット姿勢そのものだった。

さらに、中所得者以上の層の中には現状維持を望んでいる者もいるとの見方もあった。ドルへのアクセスがある者にとっては、ベネズエラは世界一安価な国だと言われた。この歪んだ経済の下で恩恵を受けている人たちも多く、劇的な政権交代を心底望んでいる人は想定されるよりも少ないと。

地方を訪れた際には、政府の政策で支給された住宅に住み、CLAP (政府による非常に安価な食料配給システム) は生活に欠かせないという人と話をすることがある。彼は、社会政策はありがたく、マドゥロ大統領に投票することに何の疑問も持たないと言っていた。彼が住む地域では、ゴミをあさって、食べ物を探すような人はおらず、決して貧しくはないと、話していた。

ただ地方であるため、投票会場も遠く、いくつかの地区の住民は一緒に乗り合いバスで投票会場まで行って投票していた。そこでは投票会場の目と鼻の先に Punto Rojo という祖国カード (政府による社会プログラムを受ける際に用いるが、投票の監視の機能もあるとされている) を確認するための会場があった。選挙に行かなかった者には CLAP が支給されない、社会プログラムを受けられないということが起こっていた。そうした環境では、違う意見を持つという考えさえ差しはさむ余地がないようにも見受けられた。

「勝ったわね！」2017年10月州知事選挙の翌日、マンションを掃除してくれているおぼさんの第一声だった。大方の見方に反し、与党が圧勝した。与党が勝ったことを私たちが勝ったと、おぼさんは発言したのだ。

貧困地区に住むおぼさんは、日々の生活の大変さを会うたびに話していた。スーパーで統一価格の商品を手に入れるための行列の長さ、バス運賃の上昇、物価の上昇、携帯を盗まれたこと、電車が整備不良で動かず時間に遅れたこと…、それでも現政権に投票した。

こうした層を支持基盤としているのが与党だった。生活が大変過ぎて考える隙を与えない。与えられることに慣れていて、恩恵を授けてくれる政府がいい政府だという声を聞く。その時は「でもあんなに生活が大変って言ってたじゃない？与党に投票したっていうことは、この状況が変わらなくていいってこと？」と質問すると、彼女はよくわからないという顔をしていた。

そのおぼさんは、2018年5月の大統領選挙では投票に行かなかったと話してくれた。「だっていくらなんでも、この状況が続くのはもういやだ。マドゥロ大統領を支持できない」と。この変化は大きいかもしれないと思った。考える隙を与えていなかった人たちから見ても、現状は異常であると判断し始めた。

結局2018年5月大統領選挙ではその変化を反映させられる結果とはならなかったが、支持基盤が揺らいできている。それを示唆する変化は起きていると思わせられる出来事だった。

最後に

今もまだ毎日ベネズエラのことを思い出す。任期終了後、カラカスやベネズエラ一部地域の危険レベルが渡航中止勧告に引き上げられ、駐在員もほぼ出国、日本人学校も一時閉鎖という状態が続いており、絶え間ないニュースに忘れる時間を与えられない、ということもあるが、カリブ海やアピラ山、あの美しい国をまた訪れたいと思う。

早くベネズエラが立ち上がり再建してほしいと願ってやまない。



ロスロケス島

(2016年10月撮影)

←エンジェルフォール

(2018年1月撮影)

エクアドル・インタグ地方鉱山開発対象地を巡って

一井 リツ子

エクアドル現地視察

近年、南米エクアドルでは、前コレア政権から開発主義が急加速している。その北西部に位置するアンデスの裾野インタグ地方でも、土地面積の約 80%の採掘権が、様々な多国籍企業らに譲渡、手続き中という状況だった。私達は 9 月に 10 日間ほど、エクアドル現地視察を行った。

初日には、アジア太平洋資料センター (PARC) スタッフ宇野真介さん、米国の水・地質学専門家 スティーブン・エマーメン氏、国際 NGO マイニングウォッチカナダ (MWC) のカーステン・フランシスコーネさんらとともに、首都キトでのアンディーナ・シモンボリバル大学で開催された「鉱山開発に抵抗する人々の全国会議」に参加した。

ここではアマゾン地帯のシュアル先住民族などエクアドル全国から様々な先住民族、環境・人権団体、政治家等が一同に会する場が提供され、コロンビアなど海外からの発表も含め 2 日間にわたり各地での経験・課題の共有、対策の議論等がなされた。

開発対象地での会合・フォーラムで

終了後、私達はキトから車で 3、4 時間程のインタグ地方へ向かい鉱山の開発対象地となっている (アプエラ、クエジャへ、セロペラード、ナンゲルビー、フニン) 村々を巡った。各所では会合やフォーラムが開かれ、この 3 名による講演が行われた。この講演ツアーは、キトでの全国会議への開催協力だけでなく、鉱山開発の実態や危険性を伝えるために PARC が企画したもので、通常は耳にすることのない鉱山に関する専門知識を共有し、住民の方々の意見を聞く貴重な機会となった。

私からはこのインタグに最初に参入した 1990 年代の日本企業 (JICA/三菱マテリアル) による水質汚染をお詫びするのとともに、同じ日本人である私達が 5 年以上インタグの情報を伝え続けていて、人々はこの地の平和や美しさが保たれることを願っているといた挨拶を行い、とても温かい拍手をいただいた。



インタグ地方セロペドラ村住民と現地視察メンバー

「11.23 現地報告会」

帰国後、11 月 23 日に京都で開催した『エクアドル・インタグ現地報告会』で、まず私からは今回の視察の内容と現状を伝えた。

フニン村の近郊にある雲霧林内で進行中のジュリマグア・プロジェクト (4,838ha/試掘 90 箇所終了) では、現在、採掘地拡大が申請中 (701ha/試掘 120 箇所追加予定) である。数年後、銅・モリブデンの生産開始予定とされているこのプロジェクトに対しては、国家監査局・護民官がエクアドル憲法に明記された自然権・人権の体系的な侵害、10 を超える深刻な違法性を指摘、各省へ採掘権、水利権等認可取り消しの勧告も行われている。

環境への影響は？

ここではすでに絶滅したと思われていた *Atelopus* 種、*Ectopoglossus* 種といったカエルが近年 2 種類も発見され、世界で消えゆく生命の息づく非常に希少、また脆弱な生態系を育む土地である。

ENAMI 社 (エクアドル) と CODELCO 社 (チリ) の両国営企業によるこのプロジェクトでは「責任ある鉱山開発」を行うという言葉が常套句とされているが、試掘段階ですでに様々な環境破壊が発生している。コタカチ郡の環境保全条例に明確に違反する原生林の伐採、滝の変色、薬剤混入水の未処理の廃棄などのほか、今回のスティーブン氏の講演で明らかとなったことがある。地熱水が

20 の試掘口から噴出しており、これはヒ素・鉛・カドミウム等注意すべき重金属の濃縮を意味している。これが削岩地の近くだと非常に問題で、通常記載されるべき項目であるにもかかわらず、鉱山企業の「環境影響調査」にまったく記載がないことが指摘された。

また彼が関わるポーランドの鉱山を例に挙げて、露天掘り鉱山（通常は深さ 0.8～1.5 km まで削岩）による地下水脈への害が指摘された。これにより発生する水の放流で、住民の飲料水となる河川も同様に汚染し、また地盤沈下などの悪影響は通常その半径 50～100 km とかなり広範囲に達し、隣国のチェコまで影響が及んだと語っていた。

その上、インタグ地方は山間部の狭い渓谷、高い降雨量や地震の発生率など、地質学上の多大なリスクを抱えていることが指摘された。今年ブラジル・ブルマディージョで起きた鉱滓ダム（廃棄物流出、死者・行方不明 300 名以上）の決壊事故では、放出した尾鉱（廃棄物）が一つの村を押し潰し大西洋まで流れていったが、その量は 1,200 万 m³ だったとされる。しかし、インタグで同様な事故が起きた場合、想定される尾鉱は 13 億 5000 万 m³ と、なんと 110 倍もの大災害の危険性が推定される。これを防ぐために必要な鉱滓ダムの高さは 400m（世界最大型の約 2 倍）という。

こうした的確なデータの不備、公的な監視不足、規制の弱さが指摘され、適地でもないため、「ここでの的確な鉱滓ダムの建設は不可能であり馬鹿げている！」と彼は言う。また住民がその危険性を知らないため、インタグでの鉱山開発は最悪のシナリオを生み得るという結論が出された。

鉱山開発の実態/カナダでは

次に、20 年間にわたりカナダ国内外の鉱山企業を監視、調査、被害地域を支援している MWC のカーステンさんは、その経験をもとに、鉱山の実態を語られた。

2014 年に起きたカナダ史上最悪のモントポリー鉱滓ダムの決壊では、2,500 万 m³ の廃滓がケネル湖や河川に流出した。セレンやヒ素による汚染により、エコシステムが破壊され、産卵に訪れる鮭の大量死によって、食用の鮭を販売する既存の産業も崩壊した。しかし、責任追及はまったく行われず、鉱



ナンゲルビーでのフォーラムに集まったインタグの住民

山企業による事故の賠償も行われていない。

しかも、企業側は、このダムの問題点、また修理費用が高額であること、カナダでは 5 年後に法的無効となり、政府はこれに対し何もしない（＝無処罰）ということを知っていたという。彼女はたとえ鉱業国とはいえ、カナダという先進国でさえ自国の鉱山企業の危機管理が出来ていないのに、エクアドルで他国の企業に対しそれが出来るのか？と述べた。

現在、鉱山企業の 60% はカナダに本部事務所などを持つという。こういった状況の背景となるのは鉱山企業発祥の地であるカナダの外交や税の優遇である。こうして野放しにされた鉱山企業が腐敗、無責任、暴力的な体質を生んでいる。

またカナダには、鉱業にとって重要なトロント証券取引所、世界最大の PDAC 鉱業年次会議の存在がある。この会議で、エクアドルは特別に 1 日をあてられ、現在カナダがエクアドルに大変関心を示していることがわかる。

現在、エクアドルは、「未採掘の豊富な鉱物資源を有する、最後のフロンティア」として、多くの多国籍企業の注目を集めている。しかし憶測であろうが、エコノミストでもあり多くの鉱業国に関わる彼女は、「エクアドルは確かに最後のフロンティアではあるが、政府が宣伝するような『鉱業国』ではない。実際には鉱物の質や量とも、それほどのもではなく、もし大量に存在していたら歴史的にすでに（ボリビアやチリのような）鉱業国になっていたはず」と語る。

「その背景となるのは、エクアドルは、現在、世界通貨基金（IMF）と債務に関する利息率などの再交渉を行っている。その返済の資格を得るため

に、鉱山の可能性を強調、投資家や企業の関心を惹くためのプロパガンダを進め、それにより多くの多国籍企業が参入、鉱山企業優遇のため法の改正を行っている。」

実際、鉱業法のほかにも、憲法に明記されている「鉱山開発には、必要とされる住民との事前協議」の対象や必要性そのものを政府は変更しようとしている。実際、フニン村でも自分達は事前協議の対象にされていないといった話が聴かれた。これは国内数件の司法裁判で、この事前協議を巡り開発対象地の住民側が勝訴していることに対して、法をねじまげてでも鉱業活動促進を推し進めようとする政府の苦肉の策であろう。

こうして、現在、インタグ地方の位置するインバブラ県だけでも、約16万ヘクタールが様々な多国籍企業に採掘権が譲渡されている。この中にはコーナーストーン社というカナダ企業の存在もある。この企業は他国において作業員による婦女暴行や村への放火等の犯罪、内部では腐敗が蔓延し、彼女は「腐っている！」と叫んでいた。

このように中南米13か国でカナダ28企業による事件だけでも、死者44名、負傷者403名、土地の守護者への犯罪化709件などが起きている。鉱山開発によって繁栄という名目で地域にもたらされるのは、環境破壊だけでなく、治安の悪化など劣悪な社会、人間としての在り方の劣化でもある。

現在、エクアドル国内でも40のプロジェクトに15のカナダ企業が参入しているが、その大部分はジュニア(=中小企業)である。15社のうち14社が、毎年損失を出し続けている。ジュニア企業は、投資家を引き付ける見通し・住民の合意取り付けのための虚偽=騙すことを仕事とし、母体となる大企業が事故・汚染などの責任転嫁、リスク共有のため、これらを経済的に維持している。

インタグに2004年から参入し、脅迫や暴力行為に及んだカナダのジュニア企業であるアセダント・カッパー社(現在カッパー・メサ)も同様であったこと(住民側がトロントの証券取引所に調査を依頼し、埋蔵量など虚偽の報告を暴かれ上場廃止となった)が思い起こされる。

また鉱山にはコスト面でも大きな問題があり、閉山には通常90億ドルの費用がかかるため、カナダでは一万もの鉱山が環境対策をせず、放棄され



ナンクルビーでのフォーラム

ている。閉山費用は政府の負担、水源への化学物質の漏れ出しなど、負の遺産となる汚染・維持費は地域負担となっている。

露天掘り工事費用にも7億~50億ドルがかかり、企業が収入を得るためには人件費・建設費用・安全性・賠償金等のコストカットが必要となるということがわかる。閉山後、汚染や貧困に苦しむ村々。「鉱山企業は豊かさをもたらさない」、「責任ある鉱山開発なんてどこにある?!」と彼女は述べた。

また企業の経済的責任を回避するため、情報の隠蔽は意図的に行われ、鉱山のインパクトを明示せず、賠償金や移転費用逃れしていることは、フニン村も同様である。

住民に貧しいという観念の植え付けることは企業戦略の一つでもあり、現在約8割の村人が農業従事の2・3倍の給料を求め、試掘等の作業員となっている。一時的な収入増により家屋の増改築なども進んでいるが、人員削減など常に雇用の不安が付きまとい、重労働、口封じと、そこには以前のようなどかな村の姿はない。

住民の声

講演を聴いたインタグ住民からは様々な意見が出され「ここでは豊かさを取り違えられている、私達は貧しくない。この社会的、環境(水域など)の豊かさは世界から羨まれるもの。『貧しい』という観念を打ち砕かねばならない。」

ある女性は、「私がリオ・ブランコ鉱山(エクアドル/中国企業傘下)で見たのは、全ての人々が騙されていた。副大統領が来て地域の発展を約束したが誰も仕事が得られず、中国人らが雇われてい

た。その集会で、母親が泣いていて1歳の子がさらわれ、12歳の子どもが空気銃で撃たれたと。また企業は脅かすためにライフルや斧で家を壊したと老人は語っていた。私達はしっかりしなくてはいけない」と。

対応として、企業による脅迫・虚偽行為には、彼女はまずリーダーや私達 NGO に相談するように訴えた。「皆が一緒にいるから!」「インタグには20年以上闘ってきた十分な知識がある。あなた方に力がないと言うのは嘘だ、誰よりも土地の活かし方を知っている」と住民らの不安を拭うとともに、企業側に対しては（コンセッションの基本情報、プロジェクト作成仔細、現段階、土地台帳、資金提供者、経済的試算など）隠蔽された情報の提出を強く要求すること、住民側も所有物の基本情報（地域の水質データ、土地・農作物など）を明確にすることが重要であると指摘した。住民の連帯と役割分担が重要であり、具体的な事例を挙げながら、企業の弱点であるコスト面や評判を使い平和的で頭を使った抵抗運動を!と語った。

MWC も、証言の集約で出資者・株主に対し企業の評判や資金調達を妨げ、報道・企業への介入など様々な活動を行っている。快活な彼女が、本気で被害地住民らを助けようとし悪辣な状況を変化させようとする、その姿勢に私は胸を打たれた。

「鉱山はこれからも私達を尊重しないだろう。経済成長は大切だが、絶対必要なものではない。私達は農民だ、経済が良かろうが悪かろうが生きていける」「ありがとう、ここでの情報を伝え人々によく考えてみてくれ!とりたい。」などの声も聴かれ、住民自らが熟考しその生きる場所を守ろうという意志の沸き起こる熱い対話の場となっていた。

報告会では、同行された PARC 宇野さんから、「鉱山開発問題に対する国際 NGO の取り組みと現地市民との連帯形成」というテーマで発表があった。今回の講演ツアーによる現地コミュニティのエンパワーメントや、INTAG での水質調査、サプライチェーン上での状況改善のため、問題の通報等により責任ある製造・販売を求める日本企業への働きかけといった PARC の取り組み、そして背景となる開発援助の問題、現行の経済構造・モデルを変える必要性などの説明があった。

最後に「利益を得る者と不利益を被る者が同じ人々だったら、鉱山開発など成り立つはずはない」というスティーブン氏の言葉を引用し、その不均衡の是正に取り組むことが、現地の市民社会と連携することではないかと報告を結ばれている。

エクアドル民衆の隆起

帰国して約2週間後、レニン・モレノ政権が打ち出した緊縮政策（いくつかの経済改革政令をまとめたパッケージ=パケタソ）に対して、先住民族、民衆による約1万人のエクアドル全国規模のデモが発生し、首都キトの国会議事堂が占拠され、10月3日には非常事態宣言が発令された。事態鎮圧のため、政府は催涙ガスや実弾の発砲など暴力的な手段で応じ、少なくとも死者は7名、重傷者1,340名、逮捕者1,152名（10月13日現在）にのぼる。

IMF 理事会は、世界銀行、国際通貨基金 (IMF) が既に融資した数十億ドルに加えて、エクアドルへの42億ドルの融資を承認している。その融資の条件として出された緊縮政策は、燃料補助金カットのため最大120%の価格上昇、エクアドルの労働者保護を深刻に損なう労働改革、雇用の不安定化、公共部門の雇用における新規契約の20%削減をもたらす賃金の下方修正、採掘プロジェクト（鉱業、石油、ガス）の賦課をもたらし、外貨を生み出す「戦略的採掘プロジェクト」があることで、IMF との再交渉が可能となったという。

今回の訪問では、「国には借金があり、（鉱業で）返済しないと労働者の賃金はなく、もっと苦しむ」という村人に対して、「政府はそう説明するが鉱業は唯一の解決策ではない。なぜ金持ちに対する税制で解決しようとならないのか、金持ちが優遇（法人税免除）され、農民ばかりが犠牲にされるんだ!」などといった、人々の多くの疑問や生の怒りの声が耳に残っている。暮らしや生きる術を奪われるその切実な想いが今回の事態を生んだのである。

モレノは一時首都機能をグアヤキルに移転したが、10月13日に緊縮財政に関する布告を撤回した。世界に誇る生物多様性に満ちたこの国の未来が、今後どうなってゆくのか。今回の訪問を通して、私はその可能性を信じたいと思った。

ニカラグアからコスタリカ、パナマへと南へ向かい、コロンビアに移ったときのことで、日本を出る時からコロンビアに行ったら会おうと思っていた人がいました。『神の下僕か、インディオの主人か』という本の著者ビクトル・ダニエル・ボニーヤです。その当時、外国で出版される書籍を手に入れることは、現在のようにインターネットはないので、情報は洋書を扱う専門書店のニュースレターなどを通じてしかなく、その上にラテンアメリカに関する情報はとても少なく、欧米で出版されたものを取り寄せて読んでいました。そうして手に入れた英訳版の著者です。コロンビア南部のシブンドイという地域での教会がどのように先住民を搾取し抑圧してきたかを詳細に調査した報告書でした。

ボニーヤとは首都ボゴタで会い、先住民の問題への関心を話し合い、すでに太田は翻訳をすすめていたので、疑問などを確認し、翻訳出版の許可をもらいました。

コロンビアに至るころまでに、わたしにもこのラテンアメリカの大きな問題は、500年前にコロンブスがこの地に到来し、この地を「発見」したと称し、スペインが武力をもって征服したことから生じていることを実感するようになっていました。そして先住民の教化ということで大義名分に掲げる教会権力の社会に及ぼす影響力の強さも、目の当たりにすることがしばしばありました。

こんな事件がありました。コロンビアに滞在していたとき、ある州の知事に若い女性が任命されました。新聞報道によれば、彼女は識字教育に力を入れ、社会的活動を活発に行っていて、若いといってもすでに相当な経験を積んでいることが伺われる女性でした。ところが彼女には離婚歴があったのです。原則として離婚を認めないカソリック教会はこの女性の任命を撤回しないならば、聖週間、イースターのミサを執り行わないと、州政府に迫ったのです。離婚歴にどんな不都合があるわけ？教会がミサを行わないことが何？と、非キリスト教徒の私には、それほど重大なこと

なのか訝しく思うくらいでした。だが大混乱ののち、ついに州政府が任命を撤回せざるを得なかったのです。

この件があったのちボニーヤに会ったとき彼がカソリック教会のあり方を厳しく批判する本を書いたために、教会から破門されたときの心境を語ってくれました。先住民を同等の人間として認め、その権利を擁護する彼のような確信を持った人ですら、毎日曜日、教会の広場前で神父が「ビクトル・ダニエル・ボニーヤを教会に逆らった罪で破門する、永遠に地獄で苦しむ罪人だ…」と、弾劾告発するのを聞くのは、本当に耐えがたかった、辛かったと。

彼の話聞いていたときはあまりにも非現実的に聞こえ、ほとんど嘘でしょう、地獄に落ちる？まじめにそんなことを言う？と思いましたが、さまざまな社会のひずみの改革を目指す運動に「共産主義は神の教えに背く」という言葉をもって抑圧的な立場をとる教会の重みは滞在するにつれ、だんだん実感されるようになりました。のちに知り合った先住民の人びとからも、教会、神というものから自由にものを考えることができるあなたたちが羨ましいという言葉が聞きました。

その後、コロンビア南部の小都市コリントで先住民の全国大会があることを大学の催し案内で知り、その集まりに行ったところで再びボニーヤに出会いました。その当時、1975年頃のコロンビアでは先住民の権利回復の運動が活発でした。その大会にはコロンビア全土からの先住民グループの代表が集まっていました。それぞれのグループに固有な衣装を身に付け、それぞれの言語とスペイン語で訴



1974年にカウカ溪谷の大農園を占拠した先住民

える彼らの強い憤りと決意の固さはよく伝わってきました。地域の差はあったとしても、土地の収奪、収穫物の圧倒的に不利な取引、通行税など恣意的な徴収、軍隊と一緒になった大地主の介入、教会の思想的な支配は、どの地域代表も共通して訴えたことです。

こうした意志を持つ人びとの集まりであったので、帰りのバスには銃を構えた兵士が乗り込んで荷物検査をするような軍の監視下にあった大会でした。そこで出会ったことで、ボニーヤは私たちに対して信頼感を持ってくれたのだと思います。何人かの各地域のリーダーを紹介してくれました。ボニーヤの口添えもあって、ある土地回復運動の実践地を訪ねることになりました。バスを乗り継ぎ、小さな山々がうねるように続く街道を相当歩いてようやくたどり着くような奥地にある村です。

彼らのひとりの小さな小屋に泊まらせてもらい、開墾と一緒に連れて行かせてもらいました。開墾に当たる間にも、一人は馬に乗って、絶えず外からの動きに注意を払っていました。そうした動きに反目する地主たちの暴力的な介入を警戒してのことです。

開墾に参加したのは若者からおばあさんまで二十人くらいだったでしょうか。数人は小さな鍬のようなものを持っていましたが、あとは木の枝くらい、ほとんど道具らしいものもないままです。一列にならんでスタートです。丈の低い芝のような草がしっかり根を張っていて、耕されたことのない土地を掘り返すのは相当な力とこつが必要のようです。

不慣れな私たちは、おばあさんにさえ引けを取りどんどん取り残されていくありさまに、みんなに陸の孤島と笑われてしまいました。育ちつつあるジャガイモ畑に肥料をまく仕事は辛うじて同じようにできたのですが、これは多すぎる、あまりたくさんやるとかえって根が焼けてしまって良くない、とダメ出し。知らないことばかりです！

一仕事を終わると、畑のすみで火を焚き、大きな鍋に収穫したばかりのジャガイモを水煮にしてみんなで食べたその美味しかったこと！私たちが日本から訪ねてきてくれたので、自分たちの土地回復の運動をどんなふうに行っているか、話してあげようということで、食事をしながら話が始まりました。



先住民組織機関紙に描かれたキンティン・ラメ

最初のころは共同で畑をやるなんて、とか、みんなで平等に分け合うなんて、できるのかねとか勝手なことばかり言っていた、今思い出すと、まあ、よくあんなことを言っていたね、と笑いあうよ、と笑っています。土地を共有してといっても、先住民の共有地の多くは、彼らがスペイン語に通じていないことや、私有という考えを持たないことから、安値で買い取られたり、だまし取られたりして、現在はほとんどの人が土地を失っていました。

公用語であるスペイン語に通じていない、読み書きもほとんどの人ができない、そんななかで話し合いを重ね、すこしずつ事実を知り、納得しながらやってきました。今は、共同して開拓し、収穫は平等に分け、市場にもグループとして出荷してむやみに買ったたかれないようにしているなどとみんな口々に元気よく話すのです。

土地回復の歴史には、自分たちのように耕されていない土地を直接耕して実質的に自分たちのものとする方法や、古文書を基に土地の権利を法的に訴えて勝ち取ろうとしたキンティン・ラメという先達がいたとか、キューバにとっても関心があるとか、それぞれが自分の関心を我先にと、本当に早口で言いたいことを言いあうのです。ちょっと口を滑らせたような発言に、それはちがうだろうと、たしなめるような発言もあったり、おばあさんたちがよく笑い、若者の発言にチャチャを入れながら、のびのびとよく話すのが、とても印象的でした。

参考文献：ビクトル・ダニエル・ボニーヤ『神の下僕かインディオの主人か—アマゾニアのカプチン宣教会』1987年、現代企画室刊

ボリビア政変で甦った先住民族の悪夢

ラ米 2019 年最大の出来事はボリビアで 11 月に起きた民・軍合同のクーデターだろう。この政変が深刻なのは、スペイン人らの米州侵略に始まる先住民族蔑視・蹂躪・殺戮の悪行の歴史が伏流水となってアブヤ・ヤラ (米州) を流れ、21 世紀の今、新たに南米の表層に現れて、近現代米州史上初の先住民族中心の民主政権を倒したからだ。

スペイン人は十字架と剣をかざし、キリスト神とスペイン国王の名の下、先住者に改宗・従属もしくは死を迫った。こうして「キリスト教化」を名目にした大陸規模の壮大な掠奪は始まった。現代流に解釈すれば、植民地建設は領土奪取・拡張のため先住者の「無人化」を謀った大規模な「民族浄化」の事業でもあった。

ラ米諸国は概ね 19 世紀 20 年代に独立した。だが独立政権はクリオージョが支配し、国家・社会の実態は植民地時代と大きく変わるものではなかった。先住民族とその混血が国民の 8 割方を占めるボリビアも然り。しかし独立後 181 年経った 2006 年、最大先住民族アイマラ人のエボ・モラレス＝アイマが大統領に就任。パラダイムは大転換した。

麻薬コカイン原料のコカ葉栽培労連指導者だったモラレスは、「コカインは悪魔、コカ葉は神」と唱えていた。政党「社会主義運動」(MAS) の幹部党员となり、05 年の大統領選挙で初当選すると、「民主と文化の革命」を掲げて改革に取り組んだ。09 年に、先住民族復権を柱とし、前文に「植民地的・共和主義的・新自由主義国家」への訣別を謳う新憲法を制定。土着神「パチャママ」は前文でキリスト教の前に置かれ、虹色に似た 7 色の先住民族旗ウィパラは「国の象徴」になり、国名は「ボリビア多民族国」に改名された。

大統領は連続 2 選が可能となり、モラレスは旧憲法下での初当選を含め連続 3 選が認められた。長期政権への足場を固めたモラレスは、石油、天然ガスなど地下資源を国有化し、国内総生産を 5 倍近い 420 億ドルへと増やした。経済成長は近年、年率 5% に達し、拡大した収益は教育・保健・社会福祉やインフラ整備に注ぎ込まれた。貧困率は 38% から 15% に減り、中産層も 35% から 60% へと厚くなった。

「ボリビア史上最も成功した大統領」と呼ばれたモラレスは、連続 3 選を可能にする現行憲法改正の是非を問う国民投票を 16 年に実施。だが僅差で敗れる。経済は好調だったが、長期政権は飽きられて

いた。政権党 MAS と公務員に官僚主義が蔓延り、支持者との間の溝は広がっていた。有権者にはモラレスの権力執着を批判する者が「国政に不可欠な政治家」と評価する者より多くなっていた。それを見抜けなかったモラレスは事態を甘く見すぎていたのだ。にも拘わらず禁じ手を使う。翌 17 年に最高裁憲法廷で「もう 1 回限り連続再選可能」の判断を勝ち取り、19 年 10 月 20 日の大統領選挙に合憲出馬した。

新任期 (20~25 年) の最終年に来る独立 200 年祭まで大統領であり続けたかったのだ。だが有権者に「嫌モラレス」感情は消えておらず、当選ラインぎりぎりの苦戦を強いられた。しかし選管は翌 21 日、モラレスが得票率 2 位の候補に「10 ポイント差をつけて勝利」と発表する。農牧場主ら富裕層は「不正があった」と決起し武装青年組織を動員、全国で暴動を起こした。警察は「コジャス (先住民) を殺せ」と叫ぶ暴徒の群を取り締まらない。

モラレスは 11 月 10 日、大混乱の中、軍部から辞任を迫られ退陣。「私の罪は先住民族に生まれたことだけだ」と言い残し、メキシコに 12 日亡命した。権力欲が結果的に墓穴を掘ることに繋がったのは否めない。だが憲政を踏みにじるクーデターは許されない。同じ 12 日、上院第 2 副議長で大統領継承順位 6 位のジャーニーネ・アニェスという富裕層側の上院議員が「神の御心を受けて」一方的に「暫定大統領就任」を宣言、米国は直ちに承認した。富裕層、軍・警察、米国の連繫による出来レースの政変だった。米国は長年、ボリビアが世界最大級の埋蔵量を誇る戦略的稀少金属リチウムの開発利権を狙っていた。

アニェスや、その背後にいるルイス・カマチョらクーデター首謀者たちはカトリック右翼ないし米福音派教会信徒。強欲な弱肉強食の新自由主義イデオロギーに加え人種主義丸出しで、先住民族の殺傷を厭わない。「先住民を 2 度と政庁の主にしなさい」と公言し、大統領政庁をはじめ統治機構からパチャママやウィパラを素早く取り払い、「聖書と十字架」に置き換えた。スペイン人到着時の「邪教掃討」の見事すぎる焼き直しではないか!

11 月下旬までに死者 32 人と負傷者 800 人が出た。死傷者は先住民族か混血だ。彼らや MAS 党员への迫害はその後も続く。次期大統領選挙は 20 年 4 月半ばまでに実施される。

シーフードライス

ARROZ CON MARISCOS

メキシコでは、コメはさまざまな料理の材料としてとても大事な位置を占めています。コメはスペイン人によって16世紀にアメリカ大陸にもたらされました。メキシコの先住民族は、少しずつコメやその他の素材を受け入れ、新たな形や味の料理を生み出しました。スペイン人たちは、メキシコにある食材を使うことで今までにない味や色合いの料理を作り出しました。メスチソもまた独自のスタイルの料理を編み出しました。フランスによる干渉戦争の時代には、フランス料理の影響も受けました。

それらがミックスしたものが現代のメキシコ料理なのです。ユカタン料理も同様に形や味のバリエーションが豊かになりました。

材料（4人分）

- ・むきエビ 200グラム
- ・イカ 200グラム
- ・コメ 2カップ
- ・サフラン（粉末小袋1、ペースト大さじ1）
- ・タマネギ小 1/2個
- ・トマト小 2個
- ・ピーマン 2個（ユカタンでは「甘いトウガラシ=chile dulce」と呼ばれる）
- ・オリーブオイル 大さじ4
- ・塩 適宜
- ・白ワイン 1/2カップ
- ・水

作り方

1) エビとイカを洗う。



マヤの人々もコメを多くの料理に活用しています。今回はユカタンでは極めてポピュラーな料理です。エビとイカを使いましたが、二枚貝やタコでもよいし、豚肉や鶏肉でもおいしくできます。サフランを使うのが特徴です。

- 2) イカを2～3センチ角に切る。
- 3) トマトを細かく刻む。
- 4) タマネギの皮をむいてみじん切りにする。
- 5) ピーマンの種を取り除き、細切りにする。
- 6) コメを洗う。
- 7) フライパンでオリーブオイルをあたため、エビとイカを軽く炒める。
- 8) トマトとタマネギとピーマンを加え、タマネギとトマトの色が変わるまで炒める。
- 9) 白ワイン1/2カップを入れ、その後、コメ2カップ、塩（適量）、サフランを入れて、しゃもじでよく混ぜる。
- 10) コメが十分隠れる量の水を入れ、火を弱める。蓋をして、焦げないように少しずつ水を足しながら煮詰める。

(1) 「加害者はあなた」のパフォーマンス

10 月 18 日に地下鉄運賃が値上げされると、チリ全土で大規模な抗議活動が発生した。値上げはのちに撤回されたものの、生活コストと格差に対する不満を問題視する人々によるピネラ政権への抗議運動は現在も根強く続いている。一方、政権側の強硬な弾圧によって 30 人近くが死亡し、ゴム弾で片目を失明した人も 350 名以上に及んでいる。催涙ガス直噴射、録画する人物への暴行、拘束者の着衣剥奪、負傷者放置など、女性や高齢者、若年者に対する警官隊の暴力は目を覆うものがある。

抗議活動開始後約 40 日間で、国家警備隊による人権侵害に関して 478 件の告発が寄せられた。うち 369 件が拷問や残酷な対応、79 件 (4 件がレイプ) が性的暴行とされる。性暴力の問題は一連の抗議行動でも提起されてきた。11 月 18 日にバルパライソで、女性グループのラス・テシスが披露したパフォーマンス「あなたの道にいる加害者」は眼を黒いマスクで覆い、「加害者 (violador) はあなた」という歌に合わせ踊るものである。歌詞は警察の標語「あなたの道にいる友達」をもじったものである。

「家父長制は生まれてからずっと私たちが裁く裁判官であり、私たちの罰はあなたが見ようとしない暴力である」と、家父長制の下で女性が被ってきた歴史的な虐待を告発するパフォーマンスは、11 月 25 日の「女性への暴力撤廃」国際デーを契機にあつというまに世界各地に広まった。トルコではパフォーマンスをした女性が拘束されたが、野党議員が抗議のため国会内でこの歌を歌ったという。



女性への暴力撤廃国際デー(11 月 25 日)首都のパフォーマンス



国際人権デー(12 月 10 日)の「チリ目の行進」

出典 : <https://cimacnoticias.com.mx/2019/12/18/>
<https://www.bbc.com/japanese/video-50654383>
<https://www.buzzfeed.com/jp/saoriibuki/un-violador-en-tu-camino>

(2) ハイチの抗議行動は現状を変えられるか

2019 年秋、LA 諸国では激しい抗議運動が展開された。11 月半ばの抗議運動による死者数では、エクアドル (8 名)、チリ (22 名)、ボリビア (23 名) を抜いて、ハイチが 48 名と最も多くなっていた。だが、ハイチが目されることはなかった。9 月以降、ハイチでは、IMF 勧告に基づく燃料値上げ反対、汚職・腐敗まみれの大統領退陣などを求め、約 500 万人が様々な抗議デモや道路封鎖に参加したとされる。水道や食糧配給など都市機能全体が停止する一方で、政府の強権的な弾圧による死者は、この一年で 100 名近くに達する。

2010 年の地震 (死者 36 万)、2016 年のハリケーン・マシュー (死者千人)、度重なる旱魃などの自然災害に見舞われ、21 世紀のハイチは世界一の支援依存国となってしまった。IMF や世界銀行の債務は 30 億ドルを超え、国家予算の 3 割以上を NGO 支援金に依存している。国内失業率は 70% を超え、1 日 2 ドル以下で生活する人は 6 割を超え、3 割が緊急食糧支援を必要としている。人道援助依存で、窮状が改善する道筋がまったく見えない。

2004~17 年にハイチに駐在した国連ハイチ安定化派遣団も安定化に貢献するものではなかった。地震時のコレラ発生 (死者約 3 万人) の原因がネパール軍兵士であることは 6 年後に初めて公表された。また、今年 12 月には、派遣団人員による女性や児童に対する性的暴行が 2 千件以上もあつたことが報告されている。子どもが生まれた 265 事例で性的関係をもつたとされる兵士の国籍の内訳では、ウルグアイ (70) とブラジル (57) でほぼ半数を占める。この種の人道的支援はもはや不要でしかない。



ガンリン高騰への抗議行動 (9 月)

出典 : <https://www.france24.com/es/20200103-las-protestas-de-2019-en-haiti-cambiarán-en-2020-el-statu-quo-de-la-isla>

(3) 殺害されるアマゾン先住民森林警備隊

ブラジル大統領ボルソナロが環境活動家グレタ・トゥンベリさんを「小娘」呼ばわりしたことはよく知られている。しかし、彼女が言及した環境活動に携わる先住民殺害はほとんど紹介されていない。環境や先住民の保護政策を完全に放棄した大統領の就任後、先住民保護区の違法伐採は急激に進行している。

この20年で、アマゾン川下流域マラニョン州の先住民は45名が殺害され、うち12名がアラリボイア保護区(41万ha、約6千人)とされる。2018年に保護区の監視活動が始まって以来、5千件弱の放火、約1,200m³の木材伐採が確認されている。今年10月だけで、約100kmの不法伐採道路が切り開かれたという。そして、2019年11月初旬、アラリボイア保護区の先住民森林警備隊指導者パウロ・パウリノ殺害に続き、12月には2名が待ち伏せ攻撃によって殺害されたのである。

マラニョン州先住民居住区では、17の先住民森林警備隊が活動している。警備隊の組織化は、森林監視活動を担う国立先住民保護基金が機能不全となった2010年である。森林の監視・警備の職務を委託された森林警備隊の法的な裏付けはない。国際環境NGO支援で、ドローンやGPSなど現代的機器を活用しながら、監視活動は行われている。活動の様子は、Agência Pública作成の映像(<https://apublica.org/2019/11/exclusivo-imagens-mostram-guardioes-da-floresta-em-acao-no-maranhao/#>)で見られる。

違法伐採地区では大麻などの麻薬栽培も頻繁に見られるという。一方、高価で取引される貴重樹イペに因んでイペ・マフィアと呼ばれる違法伐採者は、居留区指導者や森林警備隊の首に多額の懸賞金を賭けていると言われる。



ドローンで監視するパウロ



先住民森林警備隊

出典：<https://www.eldiario.es/internacional>, 21/12/2019
<https://www.hrw.org/report/2019/09/17/rainforest-mafias/how-violence-and-impunity-fuel-deforestation-brazils-amazon>

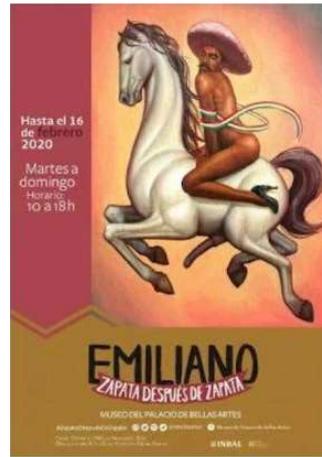
(4) 革命の英雄がゲイなら？

2019年は「エミリアノ・サパタ没後100周年」にあたる。11月下旬から、メキシコ市の国立芸術院で『サパタ後のサパタ』展が開催されている(2020年2月16日まで)。しかし、文化省のFB上で発表された広報ポスターをきっかけに、大きな論争が発生した。宣伝用に用いられた作品は、チアパス州出身のファビアン・チャイレスが2014年に制作した「革命」と題する小品(6号:40x30cm)だった。

描かれたサパタはピンク色のソンプレロとピンヒール(ヒールは拳銃の銃身)だけを身につけた全裸というものだった。メキシコ革命の英雄にふさわしい「髭を生やしたマチョ」イメージの対極にある「女性化したサパタ」である。制作者の意図は、社会に根付いているホモ嫌悪(homofobia)や女性蔑視(misoginia)を暴き出し、社会に定着している革命の英雄のマチョ化されたイメージを転換することだった。

FB上での作品紹介と同時に、「国民的英雄」への敬意の欠如という批判が巻き上がった。12月9日、会場に押し掛けたサパタの孫やモレロス州農民組織は二日以内に作品撤去を要求した。12月10日には、LGBTIの権利や表現の自由を守るべきと国立芸術院前に集まったグループが、作品撤去を主張する農民グループに暴力的に排除される事態も起きた。

結局、サパタ末裔側の不快感と制作者の意図の説明書を付ける条件で、作品が撤去されることはなかった。しかし、12月25日、知人が



CULTURA
「サパタ後のサパタ」展の広報ポスター

が展覧会場に赴いたところ、作品は既に作者自身の手で撤去されていたという。ニューヨーク近代美術館が2020年夏開催予定の「メキシコ革命とサパタ」展に展示するため60万ドルで買い取ったという。作者にとっては最高のクリスマス・プレゼントになったに違いない。

出典：<https://www.sinembargo.mx/17-12-2019/3697621>

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

2020年が始まりました。オリパラ・イヤーということで...

私に関わっているブラインドテニスはパラ競技ではないため、肩身の狭い想いをし、などと個人的僻み（実際的不利益もあります）はともかく...

日本国内では、このイベントが政治的関心を逸らすのに利用されるのではとも想定されますが、同時に、海外からの注目も日本に集まりやすいこの期間も、あえて逆に海外、私たちがいえば、中南米への関心を持ち続けたいと思います。

この「そんりさ」が媒体としてその一助になれば、ということで、グアテマラ支援活動とともに、本年もよろしくおねがいいたします。

杉本 唯史

今回の「そんりさ」印刷作業は東京で、2020年4月11日（土）

発送作業は関西で、2020年4月18日（土）の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 170 ベネズエラ・カラカスの混沌とした日々	Vol. 167 混迷が続くニカラグア
Vol. 169 対話による解決を訴えるベネズエラ左派の声	Vol. 166 AML0 津波的勝利の後には
Vol. 168 AML0、新自由主義政策と決別か	Vol. 165 闘う女性たちの集会
	Vol. 164 グアテマラ・帰還難民のムラの20年
	Vol. 163 ニカラグア解放の神学30年

メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。

入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org までご一報ください。

メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

会員の種類

- ☆会 員：年 8,000円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆学生会員：年 5,000円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆賛助会員：年 10,000円（一口） 総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆購読会員：年 4,000円 …『そんりさ』の購読、 **会員募集中です**

レコム連絡先 〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方 TEL 075-862-2556（留守電） お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは 留守番電話にメッセージをお願いします。 ホームページ： http://www.jca.apc.org/recom E-mail : recom@jca.apc.org Facebook : https://www.facebook.com/recomsonrisa/	郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協カネットワーク レコム口座 138万0024円 グアテマラ基金口座 127万0450円 (2020年1月現在) そんりさ (SONRISA) 171号 2020年1月18日発行 日本ラテンアメリカ協カネットワーク (RECOM) 定価 400円
--	--